域に應用せんを企て、第一、該試験紙法にミハエリス氏法との尿のPH値の比較。第二、試験紙法に據る尿のPHに「アチェトン」反應の強弱は相平行するや否や。第三、試験紙法に據る唾PH數と尿の「アチェトン」反應の強弱は相平行するや否やに就て検査され、左の如く總括結論されてゐる。

一、試験法による尿の水素「イオン」濃度の測定値は總例の約八一%に於てミハエリス氏法との差異は僅に〇・一〇・二なり。

二、試験紙法に據る尿のPH數と其の「アチェトン」反應の強弱は總例の約八〇%に於て相平行して減増す。

三、試験紙法に據るPH數は尿の「アチェトン」反應の強弱と總例の八〇%内外に於て相平行して減増す。

以上事實に據れば試験紙法に依る尿PHの測定値はミハエリス氏法と僅微の差あるのみ、故に臨牀上には試験紙法を應用して尿値を大約評價し得べく、又同法に依る唾PH値は尿「アチェトン」反應の強弱と其のPH値とも概して相平行するを以て、兒科臨牀に於て採尿困難の際には唾の試験紙測定法は尿中「アチェトン」の多少と共に少なくも其のPHの高低を推定し得て、體内の酸鹽基經濟を大約窺知し、由て以て之に適應する藥劑及營養療法を判定し得るの便利ありとす。

乳兒輸血法

George Ormiston 述 (The Lancet Jan. 8, 1938.)

茲に記述する手技は Princess Louise Kensington 小兒科病院に於て小兒の輸血、及び間歇的或は持續的水分輸入の方法として賞用されてゐるものである。五〇〇㏄容量のフローレンス「フラスク」の口には二つの孔を有する「ゴム」栓が施され、此の孔に相當せる硝子管が通つてゐる。その短管の方には約四呎の「ゴム」管が接續し、その他端は輸入の目的によりて或は三道活栓に連結され、或は又、皮下注射針の基部に插入するための金屬製適合物と連結される。

第一圖

輸血には皮下注射針及び一〇㏄の硝子注射器が三道活栓に連結される。充されたるフローレンス「フラスク」は上下轉倒され、而して術者の右側に於て患兒の上約三呎の高さに置く。

患兒は毛布にてよく纏包し四肢の動亂を阻止し、「ベッド」の上に仰向に臥かせる。看護婦は前腕ミ肘を患兒に副へて位置し顔と頭部を兩手にて確平りと把握する。注射すべき側に頭を轉じ、その側は完全に剃毛し耳殻の後部及び頭蓋の頂部と側部の境界までに

及びて廣く清潔にし、次で沃度及び「アルコール」にて消毒する。
 淺在側頭靜脈及其の分枝は「アンヒドレミア」の患兒にありては注
 入困難な場合も一再ではないが、かゝる際綿毛巾にて柔かに敲打

第二圖

皮下注射針に
 依る枸曹加の注
 輸血十耗の注
 射器と三道活
 栓

或は撫摩するときは

明瞭にあらはれる。

顴骨弓上に人差指を

置くときは靜脈の發

現を容易ならしめ

る。

第三圖

淺在側頭靜脈中にあ
 る皮下注射針

「フラスク」内の注入液十耗を注射器内に引出し次で靜脈内に入れ
 たる針孔よりの流出を適當ならしめるやう活栓を調整する。

溶液の持續注入の場合には、針を初めは鹽液を充たせる二耗硝子

注射器に接続してから靜脈内に刺入する。少量液の注射によりて

針の位置を示される。次で靜かに注射器を離し調節器を有する

「ゴム」管を置換する。液流の速度は「マーフイー」の點滴器及び

「フラスク」に調節器の間にある「クリップ」を用ひて加減する。

(田邊抄)

持續的十二指腸吸引裝置

F. Mitchell Higgs 述 (The Lancet Nov. 27. 1937)

持續的十二指腸吸引法は麻痺性「イレウス」及び其他の腸閉塞症に
 對して治療的價值が認識されてゐる。從來 Royal Hospital に於
 ては Wangansteen 「サイフォン」嚙を使用してゐたが多くの缺點
 あるにより余は圖に示す如き裝置に改良して満足すべき結果を得
 てゐる。

第一圖

本裝置は重き三脚臺の金屬製「スタンド」より成り下端には護謨車
 輪ありて運搬に便利し、「スタンド」には三個の木板製の嚙支持
 臺が取附けてある。此の裝置の作用は最高所の嚙から低所にある
 ものに流下する水のために前者の上半分に於て眞空を生ずる故